

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (教育学)	氏名	片山 知子
論文題目	心的外傷と精神病におけるイメージの心理療法—その回復過程の異同に関する一考察		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、心的外傷と精神病を抱えるクライアントとの心理療法における象徴化機能の回復過程の異同を考察することを目的としたものであり、第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部、終章で構成されている。</p> <p>第Ⅰ部の第1章では、象徴化機能の最たるものとして、ことばの獲得をとりあげ、病理による象徴化機能の破綻を概観した。第2章では、ヒステリー研究、戦争神経症、虐待における複雑型 PTSD へと解離に関する研究の時代による変遷を辿り、心的外傷者と統合失調症などの精神病者の状態象には重なることが多く、区別することが困難だとする近年の解離に関する研究をとりあげた。このことによって統合失調症者の臨床研究が心的外傷者の臨床研究に新たな観点を与える可能性について触れた。また、第3章では、イメージの象徴表現による自己治療への着目から始まった箱庭療法に関する知見の中でも、精神科領域において発展した統合失調症者の箱庭療法にみられるイメージの構造に関する研究をとりあげることを通して、象徴化機能と内的距離に着目し、ウィニコットの中間領域に関する理論から、イメージの創造が可能となる自他の境界生成にかかわる問題について吟味した。</p> <p>第Ⅱ部は「心的外傷者の事例研究」であり、第4章においては、ことばに問題がみられた遺棄児との遊戯療法を介し、自他の境界の生成からことばが派生し象徴化機能を獲得する過程について論じた。第5章では、愛着障害を抱えた被虐待児との遊戯療法において、クライアントが虐待体験から生じる幻想から距離を繰り返し獲得することによる主体性の変化と象徴化機能の回復の関係について論じた。また、第6章では、PTSDを抱えた身体的被虐待児との心理療法において、身体図式が破綻した状態から象徴化機能が回復する過程について論じ、第7章では、上記三事例の心理療法過程に見られた「境界」の生成と象徴化機能の回復とのかかわりが考察された。</p> <p>第Ⅲ部は「精神病者の事例研究」であり、第8章では、統合失調症を抱えるクライアントとの心理療法を通して、こころ再構築によって妄想との境界を生成することと居場所の獲得の関係について論じた。第9章では、第8章のクライアントと、一過性の精神病者との箱庭療法の記録に関して比較検討することで、統合失調症者における箱庭療法の意義について再検討した。加えて、第10章では、頭部外傷や多くの問題を抱える女性との箱庭療法過程における、語りと箱庭イメージから生じた自他の境界について論じ、第11章においては、上記三事例の心理療法過程に見られた内的世界の構造化と象徴化機能の回復とのかかわりが考察された。</p> <p>終章では、心的外傷者と精神病者の事例を通してみられた、自他の境界の再構築による幻想からの距離の生成と象徴化機能の回復の関係を総括した。両者の心理療法では、逆転移によるセラピストの構えが心理療法の準備性や防衛壁として働き、身体感覚を介した二者関係によって再構築した外と内および自他の境界が機能しはじめ、その後二者関係における中間領域に過去のイメージが出現することが明らかになった。このようなイメージは、ウィニコットの言え、中間領域に生成される幻想であり、過去のイメージは、自閉的な幻想である妄想とは違い、他者との共有が可能であることが特徴的であり、それを共同注視することによって、心理療法におけるこころの作業が可能となることが論じられた。心的外傷者においては、セラピストが目撃者となり、感覚や感情が統合され、問題に焦点づけがなされることが特徴であり、この</p>			

ようなところの作業によって、幻想との距離が生成され、現実見当識が戻り、象徴化機能が回復すると結論づけられた。また精神病患者においては、二者関係で生成したイメージを共有することで、心理的な構造を再構築し、妄想との距離を獲得することが可能となり、そのことによって、日常生活を可能とする主体性が再構築されることが明らかとなった。

上記のような議論から、心的外傷者と精神病患者いずれの事例においても、象徴機能の回復のためには、自他の境界が再構築されること、妄想や幻想と自我との距離が生成されることが重要であるが、心的外傷者のところの再構築は力動的であり、その思考のプロセスは潜在的であるのに対して、精神病患者のところの再構築は、思考のプロセスがイメージやことばによって顕在化するという相違点も見出された。

最後に、本論文で取り上げた各事例において、妄想や虐待体験から生じる象徴化できないイメージ(幻想)から主体が距離をとるための境界を生成する作業が終わると、心理療法が過去のものとなり、今が成立し、それぞれのあり方で社会生活が始まるという共通性についても若干の考察が試みられた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、心的外傷と精神病の心理療法における象徴機能回復の過程に見られる共通点と相違点について考察することを目的としたものである。

Freud や Jung の戦争神経症者の反復夢についての知見がそうであるように、夢を夢として体験できることは決して当たり前のことではない。Bion の「アルファ機能」、それを発展させた Ferro の「夢見るための装置」、Ogden の「夢見ることの失敗」といった現代の精神分析の概念にはそのことがよく示されており、そのような意味で、本論文は、夢を夢として体験する以前、あるいはイメージをイメージとして体験する以前の心的状況にあるクライアントが、いかにしてそこから回復しうるのかを詳細な事例研究を通して明らかにしようとしたものであると言えるだろう。

このような試みは、心理療法が、神経症的なこころの構造をもつクライアントだけでなく、発達的にはそれ以前ともそれ未満とも言う外傷性の解離性障害、発達障害、あるいは、種々の精神病的な状態にも対応することが求められる今日の状況にあつて、その臨床的意義を高く評価できる。

とりわけ評価に値するのは、以下の3点である。

第一に評価できるのは、歳月をかけて丹念に向き合った児童養護施設における三事例が詳細に報告されており、それぞれが困難な事例でありながら、そのセラピーの展開が見事であるという点である。

第Ⅱ部「被虐待児とのイメージを介した心理療法」では、虐待によって心的外傷を抱える者と著者が定義した「心的外傷者」の三事例が取り上げられる。第4章では、発語がまったく見られなかった女兒が、セラピストである著者との関係のなかで自他の境界を体験し、そのなかで象徴機能を備えた言葉が生まれる過程が、第5章では、愛着に問題を抱えた被虐待児が、自身の被虐待体験から生じる幻想から距離を取れるようになり、そのことでより明瞭な自己感を獲得する過程が、さらに第6章では、身体的虐待によって PTSD を発症するに至った児童との心理療法において、虐待によって破綻した身体図式が回復し、象徴機能が活性化してゆく過程が論じられている。児童養護施設では、本人の生育歴等について十分な情報が得られないことがままたり、その意味で、発達障害、愛着障害等との境目も不分明にしか見立てられない事例も多いが、これら三つの章での論考やその後の第7章「被虐待児における境界の再構築に関する異同」には、安定したクライアント-セラピスト関係を基盤にして、クライアントが自他の「境界」を体験し、被虐待体験と自分自身とを切り離す等、「境界の再構築」がそのメルクマールとなることが明確に示されている。

第二に評価できるのは、精神病的な状態にあるクライアントへのイメージを用いた心理療法に新たな知見をもたらした点である。ここで呈示されている三事例もまた、極めて困難な事例であるが、それでもなおそれを進展させてゆく様は、セラピストとしての著者の本領と言うべきであろう。

第Ⅲ部「精神病者との心理療法におけるイメージのプロセス」では、精神病的な症状を抱える者と著者が定義した「精神病者」に対して精神科病院で心理療法を行った三事例が取り上げられている。第8章では、統合失調症を抱えるクライアントが心理療法を通して、自らの妄想から距離をとることが可能となり、この世での自らの居場所を見出してゆく過程が描かれ、第9章では、第8章の事例との比較を通して、一過性の精神病状態を呈したクライアントの箱庭療法の過程を考察することで、精神病者に箱庭療法の意義について再検討し、第10章では、頭部外傷後の精神病症状を抱える女性が作成した箱庭作品やその語り立ち現れた自他の「境界」が論じられている。精神病的な状態にあるクライアントへの心理療法的アプローチは、非医師の臨床心理士にはしばしば困難や制約が伴うが、これら三つの章での論考やその後の第11章「精

神病者における境界の再構築と象徴化機能の回復」は、箱庭療法のもつ枠の機能も含めて、心理療法という営みのもつ「構造」が、クライエントの内的世界を構造化するのを助けることを具体的に示したものとして高く評価できる。

第三に評価できるのは、「解離」を一つの結節点とした「心的外傷者」と「精神病者」の精神病理の類似性・共通性にも目配りした上で、彼らの心理療法における象徴機能の回復過程の異同について論じた点である。第Ⅰ部の三つの章はそのような論考のための準備の章であり、終章では、上記 6 事例の包括的な検討によって、象徴機能の回復のためには、自他の境界が再構築されることや妄想・幻想と自我との距離ができることが双方の事例において重要であることが示唆された。加えて、両者の違いとして、前者のこころの再構築は、二者関係において了解される力動性が存在する一方、目には見えない潜在的な形でセラピストに感得されるのに対し、後者のこころの再構築は、夢や箱庭イメージ等によって具象化され、客観的に見える形で顕在化することが見出されたことは、これら二つの「病態」が発生するポイントやスペクトラムの差異を考える上でたいへん示唆深いと言えるだろう。

口頭試問では、本論文で「心的外傷者」、あるいは「精神病者」として取り上げられている事例には、前者であれば、純粹に PTSD というよりも、発達障害や愛着障害と見なしうる者までが含まれ、後者であれば、精神病と言っても、反応性のものから、内因性や外因性の者までが含まれており、分類としてはやや木目が粗いのではないかといった点も指摘された。しかしながら、これらは、本論文の価値をいささかも損なうものではなく、むしろ、今後も困難な事例に挑み続ける心理臨床家としての著者のさらなる発展のための課題とされるべきものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 31 年 2 月 28 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 1 4 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年              月              日以降